＊この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。 無断転載、複製を禁じます。

静岡新聞 2026 年 1 月 7 日付

論壇

インフレ経済の好循環へ

東京大名誉教授（国際経済学）
伊藤 元重

今年の経済はどのようになるのだろうか。

昨年末までの日本経済の流れの重要な特徴はインフレ経済ということであろう。物価や賃金が上昇を続け、株価も高騰してきた。そうした動きを受けて金利も上昇している。今年もこうした流れが当分続くことが予想されるし、そうあってほしいと思う。

物価が上がることは消費者の立場からはうれしい話ではないが、賃金が同様に上がっていけば生活水準が下がるわけではない。それどころか物価と賃金が穏やかに上がっていくことは、物価上昇と賃金上昇の好循環とも呼ばれるように、経済全体にプラスの影響をもたらす面がある。企業の収益や政府の税収なども物価と連動して増加する傾向があり、これも景気には好ましい影響をもたらす。

それでも年金生活者などは賃金が上がるわけではないので、インフレは好ましくないという意見もある。インフレは全ての人にとって良いものであるわけではないのだ。だからこそインフレ弱者を守るような減税や給付金などの制度が必要となる。政府にはそうしたインフレ対策にしっかりと取り組んでほしいものだ。

インフレ経済のもう一つの特徴は金利が上昇していくことだ。金利が上昇すれば資産運用が活性化する。国民が保有する膨大な金融資産を有効に活用することで日本経済を活性化させることを期待したい。ただ、物価と賃金の上昇が全ての人にとって好ましいものではないように、金利上昇も一部の人にとって好ましいものでもない。住宅ローンを抱えている人は、これまで低金利の恩恵を享受してきたが、金利が上昇することは気になるだろう。

このように物価でも金利でも、その影響は人によって異なるものであるが、インフレ経済は総じてデフレ経済よりも好ましいようだ。その象徴が株価の動きであり、昨年は日本の株価は天井にまで値を上げた。

ただ、市場関係者の間で語られる十二支と株価の格言によると、辰（たつ）や巳（み）の年は株価は天井をつけやすいが、午（うま）の年は尻下がりになりやすいという。過去の午年を調べると2014年には年初から年末にかけて日経平均は約7％上昇したが、02年には18・6％下がっている。1990年には40％近い下落を経験している。この年はバブル崩壊が起きている。

干支（えと）で株価の動きが決まるものでもないので、こうした話は真剣に考える必要はないだろう。ただ、巳年の昨年に株価が大幅に上昇したので、その反動が午年の今年に出てくるのか、少し気になる。

いずれにしても、今年の経済が好ましいものであるためには、インフレ経済をどう制御していくのかが問われる。物価や賃金の上昇は穏やかなものであれば問題はないが、インフレ率がさらに上がっていくことには警戒が必要だ。株価も同じで、株価が上がりすぎることには警戒も必要となる。昨年末、日本銀行はインフレ抑制を意図した金利引き上げを行った。この利上げの傾向はこの先まだしばらく続くと考えるべきだろう。